

キリスト教関連科目 「キリスト教と自然科学」の問題構制

— 21 世紀的課題を踏まえて —

瀧 章 次

1. はじめに—本報告の企て

21 世紀, 2025 年現在, 主題〈科学と宗教 (science and religion)〉に関する議論は, 二項を相反, 独立, 相関等, 多様な相互関係に収束なく論定しながら, 学術的にも多産な探求領域を持続的に形成していると英米圏では自認されている (VOLLMER and STUCKARD, 2016, pp. 456-457; SPENCER and WAITE, 2025, pp. 1-25)。実際, 近年でも二項を標題とする著書, 論集が途切れず出版されている (e.g. BROOKE, 1991; MCGRATH, 1999; CLAYTON and SIMPSON (eds.), 2006; HARRISON (ed.), 2010; MARSHALL (ed.), 2012; HARRISON and ROBERTS, 2019)。同時に, 両項を既定概念とし関係性を問う問題構制自体の批判もなされている (TYSON, 2022; SPENCER and WAITE, 2025)。

確かに日本でも一内発的と言い得るかは措いて—当該二項関係を主題とする, 科学史家の応答はないわけではない (e.g. 村上, 2014; 2025)。しかし英米でのこの様相は, 既存「宗教」に低関心を統計的に示すような現代日本社会にあっては, いささか特異と映るかもしれない (OWD, 2024; contrast 文化庁「宗教統計調査」, 宗教信者総数)。

キリスト教にあっては, 同類の主題をめぐる議論の系譜は現在に続く。例えば, 「第一の書物」, 書かれた聖典, 聖書に対する, 「第二の書物」, 神の創造した世界 nature (日本では訳語「自然」が定着) を対象とする〈知 (science)〉は, 「第一の書物」を対象とする〈知〉との関係性において, いかなる関係にあるか, かかる問いは, いわゆる「科学革命」期以来, 絶えざる論題である (PEA-

COCKE (1979) 1-49)。

このような学的状況において、講義科目「自然科学とキリスト教」の構想も、先行の学術的遺産に負うことは言を俟たない。

その上で、同時代的世界状況に留意して、〈科学と宗教〉というこの問題枠組を批判的に検討して行く必要がある。

具体的な留意としては、さしあたり、パンデミック後の世界状況がある。

2019 年末に社会的に表面化した感染症、新型コロナウイルスによるパンデミックは何をもたらしているか。

一方では、生命情報科学における進化系統解析はウィルス・レベルで実証的に進展した。その結果、科学知における不可測領域の経験的限界を変更した。そればかりか、要素還元主義と全体主義との対立構図を更新する方法論的可能性も拓かれた（金子 児玉 (2022) i-iv)。

他方、この間の情報工学の寄与は生命科学に留まらない。生成 AI 等人工知能を通じて、社会の各方面における構造的変容を招いている。その一端は、集団行動操作技術として、消費者購買、投票行動等の動機操作を質的に変化させた。状況的には、反科学を含む反知性主義や (HEATHER, 2017; MOTTA, 2024, pp. 14-85), 政治的ポピュリズムとも同時共振する中で、既存〈宗教〉の社会的行動とも連動する様相を呈している (OMER and LUPO, 2023 b; GORSKI, 2023)。

こうした人間存在の社会的変容には、〈知 (science)〉の伝達形態における媒体の変容にも連関していると考えられる。19 世紀後半から 20 世紀初頭の通信技術開発における、回線の電気信号許容量として〈情報〉概念が導入されて以来 (NYQUIST, 1924; HARTLEY, 1928), 技術上の物理的断片性が、通信当事者の言語伝達、知識伝達の拘束条件として、伝達内容の被操作性の点でも質的变化をもたらした結果、思考自身の断片性、短絡性を一部で倍加させている可能性がある。

以上の 21 世紀の状況の一端を顧みる時、〈宗教と科学〉なる、英米圏で自認される問題構制を、外在的、受け身的に、転置する無批判性に陥るのではな

く、世界的人類的に批判、更新する学的義務がある。この21世紀的課題への応答として、2025年度「キリスト教と自然科学」において企図した問題構制をここに報告する。

2. 科目名に内含される基本的課題

2.1. 二領域並列の示す課題

キリスト教と自然科学との二つの主題領域を並置する科目名は、上記、英米における同様の主題設定〈科学と宗教 (science and religion)〉を顧みる時、二領域間に、形式上の並列以上の関係を問う課題が課せられる。

青山学院大学「キリスト教関連科目」のその他においては、「キリスト教政治倫理」、「キリスト教生命倫理」等、二主題領域名目的並置ならぬ科目名もある。この冠形式では、「政治倫理」や「生命倫理」という単独で自律の領域を、キリスト教自身の内在的な論理の中に位置づけて、その具体的な内容を展開することが課題となる。

これに対して、当該科目名は二領域並置である。確かに、科学史的には、現代自然科学がキリスト教創造論に基づき神の被造世界 nature の探求として成立した経緯を想起すれば、内在的論理によって位置づけることは強ち否定されるべき事でもない。

しかしその後の相互離反的な歴史的相貌からすれば、現代の一般初学者には、二領域並置が好便な無前提的導入となるとはいうものの、同時に、特殊キリスト教的な歴史的生成論に留まらぬ、二領域の普遍的本質的關係性を問うことも課題となる。

具体的には、19世紀後半の—暗黙にプロテスタントを擁護する—結果論的〈科学勝利史観〉(e.g. DRAPER, 1874; WHITE, 1876; 1906)の批判を通して、〈科学〉生成の前史、後史とともに非西欧的〈知〉をも配視・包括する〈人類知〉理解に及ぶ全体性が求められる。

2.2. 既存「宗教」概念と「キリスト教」との差異が示唆する課題

なぜ、「宗教」とではなく、「キリスト教」との対置なのか。この問いも名目的問題以上の考察を促す。

日本語文化圏の現代的常識に倣えば、「キリスト教」は「宗教」に包括されよう。西欧でも、Christianity と religion とは同様の概念図式が趨勢であろう。しかし、これらを無批判に受け入れてよいか。

日本文化史上、漢語「宗教」は問題概念である（以下、中村、2009）。東洋文化圏における真理探究としての一元論的「宗教」観を、西欧的 'religion' 観導入に平行して、多元的文化相対的「宗教」観に変移せしめ、現代「宗教」観にまで固定化されている。具体的には、19 世紀後半、近代化過程で、西欧における比較宗教学の展開と相応して、欧語 'religion' 系を、漢語「宗教」をもって対応させた。その際、一つには、語「宗教」を〈宗〉の〈教え〉と、すなわち、〈原理的体系〉の言語的解明ならびに伝達と解釈する一方、他方では、歴史、文化に相対的な個別特殊形態を相互に独立なものとする、かかる「宗教」観を構成した。この経緯には、同様の翻訳語を通じて形成される〈哲学〉をも、〈宗教〉とは異なる、独立したものとする「宗教」、「哲学」相互独立併存の概念図式の構成とも一体のものであった。

この日本の概念図式は特殊なものである。中国における漢語「宗教」の成立にあつては、異なる二つの認識方法、「宗」、超言語的真理認識、「教」、言語的真理認識、これらの並置を示す概念であり、それは、インド思想に遡るものであった。

多元主義ならぬ一元論的なかかる〈宗教〉観に立つとき、真理探究一般の問題において、〈科学〉と一元論的〈宗教〉との本質的内在的関係性を問う課題が明確になる。

他方、〈科学〉を〈キリスト教〉と対比する場合には、〈科学〉の真理探究上の方法論的諸前提、並びにその構成全体について、キリスト教的〈真理探究〉との関係性が課題となろう。とりわけて、創造 (creation) 論的問題構制は次節で論ずる通り、単に科学革命期に留まらず、19 世紀後半、ダーウィンの進

化論以降、現在の〈科学〉にまで、本質的連関を内含する。

また〈nature〉は、神との法則的相関において、〈科学〉と〈社会〉との統合的視点を要請する。〈nature〉は、〈科学〉の成立期、17世紀にあつては、〈科学〉の探究対象領域として、法則的普遍性と相関するばかりでなく、他方、近代社会形成の原理探求において、〈natural law〉が示す通り、倫理的普遍性とも相関するものであった。いずれの普遍性も〈神の法（法則）〉に遡及される限り、両者の統一を問うことも有効な課題である。

3. 〈キリスト教〉と〈科学〉との相関

—キリスト教〈創造論〉における問題構制

名目的問題が内含する諸課題の中から、〈科学〉の方法論的前提と相関するキリスト教〈創造論〉の問題圏域を先ずは明らかにする。

先の一元的〈宗教〉観に立つ場合、仏教であれ、神道であれ、その真理探究の方法的前提を析出することにより、〈科学〉のそれとの比較検討は可能である。かかる比較研究は既に文化人類学においてなされている。またインド思想の側からも夙になされている。例えば、〈科学〉の関数的世界観は、自存する本質を否定する〈法空〉と一定親和的である。

では同様の問題系列として、キリスト教の場合どうか。

科学革命期、〈natura〉を対象とする「哲学」(philosophia) は (philosophia naturalis), キリスト教〈創造論〉と相関する一歴史的先行諸要因は、「12世紀ルネッサンス」さらには、古代ギリシア自然学、イスラーム哲学にあるけれども(伊藤(2006))。

その制約の範囲内で、〈神〉、神の被造世界〈natura〉、〈人間〉の三者関係の構成において、〈科学〉は、聖典としての聖書の真理を探究する神学に対して、第二の書物としての〈自然(natura)〉を〈人〉が読み解くことを可能とする問題構制に関与している(e.g. GALILEI, 1623, p. 25)。

この三者構造において、ニュートン『自然哲学の数学的原理』(NEWTON, 1st ed.: 1687; 2nd ed.: 1713; 3rd ed.: 1726) 第3巻「世界のしくみについて (de

mundi systemate)」第2版、第3版の方法論並びに巻末「一般的注」(NEWTON, 'scholium generale') が示す通り、創造論理解においても神の意志に事物の本質が先在しているという本質優位論ではない。むしろ、主意説 (voluntarism) (Foster, 1934; 1935; 1936) と言われる通り、世界創造においては、被造物の本質よりも神の意志が先立つとする立場に遡及し得る。ニュートンは、感覚に現れることがらを、すなわち、現象を、その探求の対象に設定して、この現象相互について、整合的に説明できるかどうか、その範囲に探求の限界を定めており、その範囲を超えて、現象の背後に働く何かについて仮説を立てるということをしてしない。探求対象は、ものの本質ではなく、感覚によって繰り返し確認される限り、人間がものに帰属するところの偶有的性質 (attributes) に留まる。現象に関する数学的幾何学的証明の記述に当たっては、どこにも神は登場しない。「神」への言及は、第2版、第3版に付加された巻末「一般的注」のみである (NEWTON, 'scholium generale')。そこでも神の実体はなお不可知である。

万物を支配する創造主ではありながら、〈神〉を探求対象に含まない、この探究構造は、ニュートン以前、すでに17世紀の初めの時点では、神を探究対象とする探求 (神学) とは別の独立した知識領域のように考える傾向は潜在していた (PEACOCKE, 1979, pp. 2-3)。

この創造論的構図と相關する真理探究にあつては、神の働きは世界設計とその構造にその痕跡を残すだけとなる。感覚世界の事物の偶有的性質から、神のはたらきを、延いては、神の存在を、推論するという探求の系譜は、1802年のペイリーの『自然神学』(Paley, 1802) を経て19世紀前半のBridgewater Treatises にまでたどることができる (e.g. WHEEWELL, 1833)。しかし、この理論的構図では、主意説自身の潜在的可能性たる、「〈神〉の抹消」として、19世紀末、不可知論 (HUXLEY, 1889) や、20世紀初め、意味の検証理論による神学的言明の無効性 (AYER, 1936) に至る道筋はすでに用意されていたとも言える (BROOKE, 1991, pp. 192-195)。

進化論が—ラマルクはじめ先行諸自然誌思想に基づき (BROOKE, 1991,

p. 243), ダーウィンとウォレスにより形成されて行くものとして (BROOKE, 1991, p. 255) 一道徳や神の存在をも宇宙という感覚的観察世界の物質的過程の帰結であるとするのも一確かに、聖書の権威、とりわけ創造論にとっての打撃 (BROOKE, 1991, pp. 226-227; 276-282; MCGRATH, 2006, 685) が歴史的にあることは事実であるとしても一ある種の唯物論的帰結としては免れがたいことだったのではないか。例えば、諸現象間の整合的説明というニュートンのプログラムの基に、内発的、外生的諸要因の構造的相互関係の総体を把握することからすれば、創造時の設計も目的も、構造的変動に回収されるものとして、もはや創造時の設計から神の存在を弁証する自然神学もその理路の妥当性を失うのは当然のことではないか (BROOKE, 1991, pp. 197; 221-222)。

従って、'nature' 系の語法として、個別特殊な感覚可能な諸性質からなる諸現象の総体、さらには、それらの特殊なふるまいに最終的には還元される数学的に総体的に表される法則的前提、これらの一方、または、両方を意味するようになることも、そもその方法論から来る帰結と言えるのではないか。結果として、17世紀にはまだ残っていたと考えられる、神と等値される 'nature' 系の語法も、19世紀には、風韻は残しつつ実質を失って行ったのではないか。

このような西欧世界内部で19世紀前半まで、キリスト教の創造論に育まれた〈科学〉は、ウェーバーの資本主義生成論同様 (WEBER, 1920, II.2), 世界的な支配体制を確立した段階では、その生い立ちはや単に挿話的なものにとどまると言うべきであろうか。

4. ダーウィンの〈地球生物学的進化論〉における探求者〈人間〉の理論的地位

〈科学〉は、ダーウィンの進化論に至って、その方法論的淵源であるキリスト教も、その信仰も、生成変化する物質的過程総体の一部とすることになるならば、〈科学〉はどのような変貌を遂げたのか。

〈神〉も信仰も、道徳も、その他意識内容すべては、どれも、感覚的に観察可能な現象と存在領域を異にする理由がないとすれば、キリスト教もその他の宗教も同じ存在領域に位置づけられることになる。

この存在領域を物質的過程総体とすれば、創造論の三者構造における神の先在性という意識内容もこの総体に組み込まれることになる。

ダーウィン進化論 (DARWIN, 1839; 1859; BROOKE, 1991, pp. 259-261; 279-281; MCGRATH, 2006, p. 688; 689) が内包するこの存在領域一元論は、もしそれが妥当ならば、いかなる理論的帰結を齎すか。

まず〈キリスト教と自然科学〉という問題設定は、理論的初発として、歴史的に機能していた事象にとどまり、理論構成上の特権性を失う。せいぜい、現象としての諸「宗教」の一部として包含され、〈宗教と自然科学〉という包括的論題に吸収されることになろう。

ダーウィンの理論の含意を現代的にとらえなおしてみるならば、物質的過程総体は、仮に現代の宇宙創成論 (cosmology) の一仮説に従って、時間的に 130 億年余り続いてきているとしよう。その中の太陽系惑星地球に誕生する生命史をたどれば、46 億年余りの歴史のうち、ほぼ同等の長さの生命史の中で、最近、せいぜい数百万年の時間幅で、人間という生命体が、地球惑星生命体の遺伝子における変異がもたらす系統進化の過程で生まれ、生物種としては、生成変化の諸要因によって、消滅して行く過程の一部に位置づけられる物質的現象であるとしよう。

ダーウィンの理論構成に従えば、〈道徳〉も〈神〉もそうした地球惑星生物の進化という物質的諸過程総体の中の人間の進化過程の一部である「意識」に位置づけられることになろう (DARWIN, 1871, pp. II.394-396; PEACOCKE, 1979, pp. 63-67; MCGRATH, 2006, 689)。そうだとすれば、すでにこの総体も「意識」の一部ではあるまいか。

出口はあるだろうか。この物質的過程総体を構成している記述とは改めていかなるものか。生物の形態観察一つとっても、素朴实在論的にありのまま存立しているわけではない。それは感覚的所与を方法論的に再構成した結果である。感覚世界を方法論的に形と大きさに抽象して観察記述することに始まり (e.g. GALILEI, 1623, pp. 196-197), そこから累積的に積み重ねられてきた再構成記述の総体であり、記述様式としては数学的幾何学的に一段抽象化されも

しよう。この物質的過程総体の中に地球惑星生物の進化もあり、その過程で、人間が誕生し、その系列の中に、人間による観察記述も、その累積的総体も、従って進化論そのものも同次元に理論的に配置する構想と言えよう (MORRIS, 2010, p. 152)。

この理論的構想の基幹として、観察記述の主体性は、しかしながら、当該総体とは時空的なつながりのない理論的別次元の存在性格を有しながら、他方、観察記述という事象は当該総体の時空的同次元にあるという相関が成立する。このことはいずれの次元もそれぞれ自存し得ないと同時に、いずれかの次元に包摂することもできない相関性の存立を示唆する。

この相関性存立とは、地球惑星生物の感覚的対象世界に対する〈刺激－反応〉という原初的物理化学的現象とは異なる、〈数的認知 (numerosity)〉から〈質的認知〉にまで至る〈概念的認知〉の存立、あるいは、〈再同定 (「眼前のあるこれをあのものとして把握する」)〉の存立と相即すると理論的に言い換えられるならば、これらの存立とは、どの次元に属することであろうか。

真核細胞への進化過程に既に内在している〈神経節から脳への進化〉に特異な再帰的伝達という神経線維間の電気的物理化学的現象の次元と同一の次元に属していると言い得るか (MORRIS (2010) 160-163)。また、原生生物の活動における合目的性や個体間協働から類推可能な事象の進化形態として、物理化学的現象と同次元に置き得るか (Morris (2010) 161)。いずれも決定的な解は得られていない。

もし同一次元とはなし得ないならば、そのことの意味するところ、物質的過程総体とひとの意識との相関の存立は、物質的過程総体の存立次元には位置づけることができないということになる。従って、物質的過程総体と意識との関係の存立は、物質的過程総体と同じ存在領域にある物事同士の説明方式では説明できないことがらとなる。

従って、ダーウィンの理論の射程は、すなわち現代的な〈科学〉の現在地は、それ自身、自律自存的に自己完結するようになって、真実態には、そうではないということになる。すなわち〈科学〉は、真理探究構造において、一元論的

〈宗教〉やキリスト教との相関をなお問う余地がある。

5. 〈nature〉概念を媒介とする〈科学〉と既存〈宗教〉との関係性

神の法に最終的には帰属する、〈nature〉次元の「法・権利」(ius naturalis)を探究することは、〈科学〉における感覚的現象世界の整合的説明としての関数関係の把握とも、神の被造世界としての〈nature〉の探求とも、神、〈nature〉、探求者としてのひとの三者を媒介して相関するものである。

〈科学〉の場合と同様に主意説の射程において、ius naturalis 思想においても、〈神〉の抹消はすでに胚胎していた (GROTIUS, 1625, prolegomena, 39; 58; I.1.15)。

イギリスでは、nature の次元における法則性の神に対する優位性の観念は、17 世紀末、名誉革命後、経済的政治的国家における政教分離と同時期に生起している (BROOKE, 1991, 199-200)。

ダーウィンの「自然選択」という物質的過程総体一元論も、その理論的形成過程にあっては、社会的経済的競争の鏡像であった (BROOKE, 1991, pp. 261-263)。マルサス『人口論』(MALTHUS, 1826)であれ、植民地における武力行使であれ、人間本性としての natura 理解の点で、外生的競争に基づく自己保存的生存欲求を人間性と規定することにあるとすると、しかもその規定には同時代の資本主義経済における競争との類比が働いているとすると、それ自身、感覚的現象間の整合的説明という純粋な〈科学〉方法論には収まらないものを含んでいる。

しかし、他方では、〈nature〉の次元としての理性がそのまま無反省的に顕彰されて行っただけではない。キリスト教にあっては、神の次元から、すなわち、〈霊 (πνεῦμα)〉の次元からの批判は、社会構成原理の論域において批判として機能していた (LUTHER, 1522, scholium ad ψυχικός, 1 Cor. 2.14; WEBER, 1920, II.1)。

実際に、nature に対しては無反省的に没却することはなく、〈nature〉に「打ち克つ」ことは、自己保存的な欲求・欲望を克服する意味で使われていた

(THOMAS à KEMPIS, 1418, III.55.2 ; ERASMUS, 1516; cf. THOMAS AQUINAS, I^a-II^ae q. 109 a. 3 arg. 2; contrast BACON, 1620, Aforism 3)。

また、社会契約説にあっても、市民社会は、*natura*の段階からの非連続的転移として示されている (HOBBS, 1651, II.18.91; II.26.150; SPINOZA, 1670, Cap. 16, 179; 185; LOCKE, 1689, II.4; 123; ROUSSEAU, 1762, I.8)。

キリスト教にあっては、〈科学〉も社会形成原理も *natura* を超えて〈神の法〉における普遍性を探究するものである限り (e.g. *Institutiones Justiniani*, lib. 1, tit. iii, 11 (SANDERS, 1883, p. 13); SELDEN, 1640, I.III (p. 37)), 既存〈宗教〉概念並びに単なる技術知に頹落して国家主義に従属するに至る状況を批判する上で、霊的次元に立つ理性批判はなお有効である。

6. おわりに

〈科学〉が、21世紀の現代的状況を顧みる時、人間性の限界に基づく不可測領域に限界づけられたものとして、とらえ直されてくるに及び、その限界内での、その社会構成的性格については、単に、人間にとっての手段の領域の拡大として、放任されるのではなく、何よりも〈科学〉の当事者が、その理論と実践に内在する社会構成的性格について、自覚的に理解を拡大して行くことが求められるものである。

そのような社会構成的な性格をも含めた、〈科学 (science)〉の総体を考える時には、その全体を限界づけるものとして、総体的な真理探究としての「宗教」一般的見地ばかりでなく、改めて、一元論的〈宗教〉観、並びに、キリスト教信仰における理性批判は、今なお有効な実践的理性使用を提供するものとなる。

参考文献

- AUSTIN, W.H., *The Relevance of Natural Science to Theology*, New York, 1976.
 AYER, A. J., 'Chapter 6 Critique of Ethics and Theology', *Language, Truth and Logic*, Penguin Books, 1936, (the edition inspected: 1952, pp. 102-120).
 BACON, F., *Novum Organum*, 1620, London.

キリスト教関連科目「キリスト教と自然科学」の問題構制
— 21 世紀の課題を踏まえて —

- BARBOUR, I., *Issues in Science and Religion*, Englewood Cliffs, New Jersey, 1966.
- BRAITHWAITE, R.B., 'An Empiricist's View of the Nature of Religious Belief', in: RAMSEY (ed.), 1966, pp. 53-73.
- BROOKE, J.H., *Science and Religion: Some Historical Perspectives*, Cambridge, 1991.
- 文化庁 「宗教統計調査」 (https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu/index.html)
- CLAYTON, P. and SIMPSON, Z. (eds.), *The Oxford Handbook of Religion and Science*, Oxford, 2006.
- DARWIN, C., *Narrative of the Surveying Voyages of His Majesty's Ships Adventure and Beagle between the Years 1826 and 1836*, 3 vols., London, 1839.
- , *On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*, London, 1859.
- , *Descent of Man*, 2 vols., London, 1871.
- DRAPER, J.W., *History of the Conflict between Religion and Science*, (The International Scientific Series), New York, 1874.
- ERASMUS, D., *Paraclesis, Novum instrumentum omne*, Basileae, 1516.
- FOSTER, M.B., 'The Christian Doctrine of Creation and the Rise of Modern Science', *Mind*, 43, 1934, pp. 446-468.
- , 'Christian Theology and Modern Science of Nature (I)', *Mind*, 44-176, 1935, pp. 439-466.
- , 'Christian Theology and Modern Science of Nature (II)', *Mind*, 45-177, 1936, pp. 1-27.
- GALILEI, Galileo, *Il Saggiatore*, Roma, 1623.
- GORSKI, P., 'Religious Nationalism and Right-Wing Populism', in: OMER and LUPO (eds.), 2023a, pp. 21-50.
- GROTIUS, H., *De iure belli ac pacis libri tres*, Amsterdam, 1625.
- HARRISON, P., *The Bible, Protestantism, and the Rise of Natural Science*, Cambridge, 1998.
- (ed.), *The Cambridge Companion to Science and Religion*, Cambridge, 2010.
- HARRISON, P. and ROBERTS, J., *Science without God? Rethinking of the History of Scientific Naturalism*, Oxford, 2019.
- HARTLEY, R.V.L., 'Transmission of Information', *Bell System Technical Journal*, 7, 1928, pp. 535-563.
- HEATHER, A., 'Overview of the Science of Science Communication', in: JAMIESON, K.H. et al. (eds.), *The Oxford Handbook of the Science of Science Communication*, Oxford, 2017, pp. 24-33.
- HOBBS, T. *Leviathan*, 1651, London.
- HUXLEY, T.H., 'Agnosticism', *The Nineteenth Century*, 15, 1889, pp. 169-194.
- 伊藤俊太郎, 『十二世紀ルネッサンス』, 講談社, 2006.
- 金子勝 児玉龍彦, 『現代カタストロフ論—経済と声明の周期を解き明かす』, 岩波書店, 2022.

- LOCKE, J., *Two Treatises of Government*, 1690, London.
- LUTHER, M., *Das Neue Testament Deutsch*, Wittenberg, 1522.
- MALTHUS, Rev. T.R., *An Essay on the Principle of Population*, London, 1826.
- MCGRATH, A.E., *Science & Religion: An Introduction*, Blackwell, Oxford, 1999.
- 'Darwinism', CLAYTON and SIMPSON, 2006, pp. 681-696.
- MORRIS, S.C., 'Evolution and the Inevitability of Intelligent Life', in: HARRISON, 2010, 148-172.
- MOTTA, M., *Anti-Scientific Americans: The Prevalence, Origins, and Political Consequences of Anti-Intellectualism*, New York, 2024.
- 村上陽一郎, 『奇跡を考える—科学と宗教』, 講談社, 2014.
- , 『科学史家の宗教論ノート』, 中央公論新社, 2025.
- 中村元, 「『宗教』と『哲学』の意義」, 中村元 三枝充恵, 『パウワダ [佛教]』, 講談社, 2009, pp. 431-459.
- NEWTON, I., *Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica*, London, 1st ed.: 1687; 2nd ed.: 1713; 3rd ed.: 1726.
- 'scholium generale', Newton, 2nd ed.: 1713; 3rd ed.: 1726.
- NYQUIST, H. (1924) 'Certain Factors Affecting Telegraph Speed', *Bell System Technical Journal*, 3, 1924, pp. 324-346.
- OMER, A. and LUPO, J., *Religion, Populism and Modernity: Confronting White Christian Nationalism and Racism*, Notre Dame, Id., 2023a.
- 'Introduction: The Cultural Logic of White Christian Nationalism', iid. (2023b) pp. 1-20.
- OWD, 2024: Our World in Data, 'How important religion is to people in life, 2022', 2024. (<https://ourworldindata.org/grapher/how-important-religion-is-in-your-life>)
- PALEY, W., *Natural Theology: or, Evidences of the Existence and Attributes of the Deity, Collected from the Appearances of Nature*, London, 1802.
- PEACOCKE, A.R., *Creation and the World of Science: The Bampton Lecture, 1978*, Oxford, 1979.
- RAMSEY, I.T. (ed.), *Christian Ethics and Contemporary Philosophy*, New York, 1966.
- , 'Towards a Rehabilitation of Natural Law', in: id. (ed.), 1966, pp. 382-396.
- ROUSSEAU, J.-J., *Du Contrat Social ou Principes du droit politique*, Amsterdam, 1762.
- SANDARS, T.C., *The Institutes of Justinian, with English Introduction, Translation and Notes*, 7th ed., London, 1883.
- SELDEN, J., *de iure naturali et gentium iuxta disciplinam ebraeorum*, London, 1640.
- SPENCER, N. and WAITE, H., *The Landscapes of Science and Religion: What Are We Disagreeing about?* Oxford, 2025.
- SPINOZA, Baruch de, *Tractatus theologico-politicus*, Hamburgi, 1670.
- STANLEY, M., 'God and the Uniformity of Nature: The Case of Nineteenth-Century Physics', in: HARRISON and ROBERTS, 2019, pp. 97-110.
- THOMAS à KEMPIS, *Imitatio Christi*, 1418.
- THOMAS AQUINAS, *Summa Theologica*.

キリスト教関連科目「キリスト教と自然科学」の問題構制
— 21 世紀的課題を踏まえて —

- TYSON, P., 'Introduction After Science and Religion?', in: Harrison, P., Milbank, J. and Tyson, P., *After Science and Religion: Fresh Perspectives from Philosophy and Religion*, Cambridge, 2022, pp. 1-11.
- VOLLMER, L.J. and STUCKARD, K.v., 'Science', in: STRAUSBERG, M. and ENGLER, S., *The Oxford Handbook of the Study of Religion*, Oxford, 2017, pp. 450-471.
- WEBER, M. (1920) *Die protestantische Ethik und der „Geist“ des Kapitalismus* (hrsg. von: *Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 20, 1905, 1-54; 21, 1905, 1-110).
- WHEEWELL, W., *Astronomy and General Physics Considered with Reference to Natural Theology*, London, 1833.
- WHITE, A.D., *The War of Science*, New York, 1876.
- , *Autobiography of Andrew Dickson White*, 2 vols, New York, 1906.